

## 平成27年度第2回松江市総合教育会議 会議録

日 時：平成27年6月29日（月） 14：30～

場 所：防災センター

出席者：【市長】 松浦市長

【教育委員会】 清水教育長、櫻井委員、布野委員、伊藤委員、多々納委員

【事務局】 広江副教育長、岩田副教育長、小塚教育委員会次長、  
飯国教職員課長、古藤学校教育課長、前田学校教育課指導研修係長、  
錦織教育総務課総務係長、松浦総務部長、土江地域振興課長

欠席者：なし

### 【1 市長あいさつ】

○松浦市長

本日は、第2回目となる総合教育会議でございますが、皆様方には出席をいただきありがとうございます。

第1回目を4月末に開催いたしました。その際には、この会議の実施要領や教育大綱を策定することができたところです。

これから、松江市の子どもたちの教育の現状やその在り方、支援策について、教育委員会と市長部局とが具体的に協議していくわけですが、教育委員会の問題だけではなく、市長部局の方でも子どもたちに関わることや教育に関わることがたくさんあります。そういったことも出ささせていただいて、いろいろな意見交換をしていきたいと思っております。

昨年度から教育委員会で、全国や県が実施する学力調査の結果について学校別の公表を決定されたところです。学力向上への取組に力を注がれていますが、様々な教育施策として実現できるように努力していきたいと思っております。

今、市長部局でも地方創生ということを言っています。その中で人材育成が一番大事です。何よりも私たちが地方創生で考えているのは、この松江に住むということ在全国の人に選んでもらえる、そういうまちにしていきたいということです。

そういう意味で、松江は日本一住みやすいまちだという評価を国からいただきました。いろいろ異論はありますが、高齢者の受け入れ先として全国41の中の一つに選ばれたということで、これらはいずれも教育問題も含めて松江市が非常に住みやすいところだと

いう評価をいただいたものだと大変うれしく思っているところです。その中の一つの要素として、教育あるいは学力の問題があると思っています。

つきましては、今年度は4回の会議が予定されていますが、学力向上対策をテーマとして話し合いを行ってまいりたいと思っておりますし、それと並行して市長部局のいろいろな課題につきましてもご意見をいただければと思っているところです。

それでは、本日は、4月末に行われた全国学力調査の自校採点の結果がまとまったようですので、その結果の報告から話し合いを進めていきたいと思えます。まず、事務局からの報告をお願いします。

## 【2 協議】

### (1) 全国学力調査結果（自校採点）の報告

○岩田副教育長

私の方から、4月21日に実施された全国学力調査の自校採点結果の概要について、配付資料をもとに簡単にご報告させていただきます。

資料P1は、小学校の国語A・B問題、算数A・B問題、理科の正答数の分布が示されています。A問題は主として「知識」に関する問題で、B問題は主として「活用」に関する問題となっています。グラフは、縦軸が何割の児童にあたるかという%、横軸は何問正解したかを示す問題数となっています。

これまでの松江市の特徴として、小中ともに上位層の子どもたちが至って少ないということがありましたが、教科やA・B問題で違いはありますが、少しずつ上位層が見られるようになってきていると感じています。一方、これまでと同様に、B問題になるとずいぶん下がってしまうという点は、これまでと変わっていません。特に今年度は、算数のB問題の低さが目につきます。理科についても、分布の山があまりなく、平均化しています。算数Bを除いては、小学校での努力が感じ取れるものと思っています。

P2は、中学校の結果です。国語では、AとB問題との差があまり出なかったようです。A問題が下がり、B問題がこれまでで最高の出来でした。数学は、毎回あまり山が見られず、B問題は過去最低の平均正答率となりそうです。理科は、山がほとんど見られず、50点を中心として平均化しており、本当に珍しい分布となっています。

P3は、小学校の国語A・B、算数A・B、理科の設問別正答率です。問題を作成した国立教育政策研究所によると、A・B問題ともに正答率70%を一つの達成の目安とし

ており、あくまで100%を目指しているとのこと。設問によっては90%を超えるものから50%を切るものまで様々です。P4からは、各問題の概要や出題の趣旨と併せて、評価の観点と問題形式が示してあり、最後にその問題の平均正答率を載せています。一応、70%以上に◎、40%以下に▲の印を打っています。また、右の最後に別冊の解答分析の資料のページ番号を書いています。別冊資料においては、よくできた問題、課題の見られる問題として、A・Bそれぞれ2問ずつ、ポイントが高かった問題、反対に低かった問題の順番に載せています。

それでは、具体的に、小学校国語のP4-5のところですが、A問題はよくできていました。その中でも、別冊資料のP1の漢字の読み・書きが高い正答率となっています。B問題では、別冊のP2-4の目的に応じ、中心となる語や文を捉えること。別冊のP5-6の新聞の割り付けが高いです。

課題の見られる問題は、A問題では、別冊のP7-8のコラムを読み、表現の工夫を捉えることがたいへん低く、主語を捉える問題も今ひとつでした。B問題では、別冊のP9-10の取材した内容を整理しながら記事を書くこと、別冊のP11-14の文章と図を関係づけて自分の考えを書くことが低かったです。

続きまして、小学校の算数です。よくできた問題は、A問題では、別冊P15の四則計算と式で表現された数量関係を図と関係づけて理解することができました。B問題では、別冊P16の平行四辺形の4つの辺の組み合わせと別冊P17のトマト7個の最も安い買い方が高い正答率でした。

課題の見られる問題は、A問題で別冊P18の二等辺三角形となる円の性質を選ぶことと別冊P19の分度器の180度より大きな角を求める問題でした。B問題は、たくさん課題がありましたが、特に別冊P20-21の長方形の面積を2等分する考えを基に分割された2つの図形の面積が等しくなることを説明することができませんでした。また、20%増量したものが480mlで増量前を求めることができませんでした。例年こういった傾向がありますが、割合の理解が不十分だったと思います。

それでは、小学校理科です。よくできた問題は、別冊P23-24の打ち水の効果について、グラフと関連付けて考えることができる。別冊P25の振り子時計の調整の仕方で、条件を制御しながら構想できる。別冊P26の水蒸気が水の気体であることを理解しているでした。

課題の見られる問題は、別冊P27-28の水の温度と溶ける砂糖の量で、グラフから水

温が下がった時、出てくる砂糖の量を選び、その理由を考えることや別冊 P 29 の方位を判断するために、観察した事実と関連付けた考察が不十分でした。

資料 P 10 からは中学校です。小学校と同様に、70%が目安で、70%以上に◎を 40%以下に▲を付けています。

それでは、中学校の国語です。A問題は、よくできている問題も多く、特によかったのが、別冊 P 30 の漢字の読みや語句の意味を理解し文脈の中で適切に使うことでした。B問題では、別冊 P 31-33 小泉八雲の「むじな」で、「お泣きなさるな」という翻訳の効果について選ぶものでした。別冊 P 34-35 のフリップの作成で、効果的なポイントを選ぶ問題も良くできていました。相手の反応に合わせた話し方について、理解できていたり、文章から情報を取り出したり、表現を工夫したりすることの理解はよくできていました。

課題の見られる問題では、A問題については、別冊 P 36 の単語の種別の理解と別冊 P 37 の「たなびく雲」が分からなかったようです。B問題では、別冊 P 38-40 の資料を参考に 2020 年の日本の社会について自分の考えを書くことが難しかったようです。また、別冊 P 41-43 の資料提示の仕方、それを選んだ理由を具体的に書くことでした。とにかく、自分の考えを書くことがこれまで同様に不十分です。

次に、中学校の数学です。よくできていた問題は、A問題では、別冊 P 44 の比の問題と一次式の減法でした。B問題では、別冊 P 45 の連続する 3 つの数の和が中央値の 3 倍になることを式で表す問題と別冊 P 46-47 の表彰する学級を決める時、立てた構想を数学的に表現する問題がよかったです。基本的な四則計算や一次方程式の解法や図形の基本的な概念理解、グラフからの情報読み取りはよくできていました。

課題の見られる問題は、A問題では、別冊 P 48 の数量関係を文字式にすることと別冊 P 49-50 の対頂角は等しいことについて、証明の必要性和意味の理解が不十分でした。B問題では、別冊 P 51-52 の平行四辺形となるための点の位置について説明することと別冊 P 53 のプロジェクターでの投影距離と画面の高さを式で表すことができませんでした。立式や証明ができず、数学的に説明する力も不足しているようです。

次は、中学校の理科です。よくできた問題は、別冊 P 54 の実験結果を分析・解釈し、キウイフルーツがゼラチンを分解することを指摘できたり、別冊 P 55 の天気図から風力を読み取るなど、実験結果をもとに正しい考察を選択することができ、セキツイ動物についての理解もできていました。

課題の見られる問題は、別冊P56の他者の考察を検討・改善し、水の状態変化と関連付けて雲の成因を正しく説明することや別冊P57-58 スイッチの入切による磁界の変化を説明することができず、事象を科学的に説明できないでいるようです。

資料P19に今回の総評を簡単にまとめていますのでご覧ください。今回は、自校採点のため多少の誤差が予想される上、全国や県のデータもないため、8月末の正式な採点結果に基づいて比較・分析の上、対策の検討をしっかりと行っていきたいと思っているところです。

報告は以上とさせていただきます。

#### ○松浦市長

それでは、まず皆様から印象など、ご意見をいただければと思います。

実は私もこの問題をやってみました。よくできた問題と言われるものは、どちらかというとながはつきりしているというか、選択の余地がないということで、あまり迷うことがなかったのではないかと思います。特に国語で、文章を作らせるということになると、これが100点満点とか正解だというものではないわけなので、そういったものをどういうふうにして表現したらいいのかというところが難しいのかなと思いました。

#### ○清水教育長

比較が無いので何とも言えませんが、市長がおっしゃったように、自分の考えをまとめて書く、あるいは段階的に整理してまとめていくという問題ができていない。それから、算数や数学では図形の領域や割合や証明というところができていないと思いました。考えてみると、これは昔からある問題で、私たちも小さいころはそれが苦手だったなどの思いはありますが、全体としては応用・活用問題は出来が悪いという気がしています。特に、私は「文章を書く」ということが大切ではないかと考えており、最近も授業も見せていますが、うまく授業を進めていくために教師が予めお膳立てをしています。プリントとかシートとかを用意するわけです。そうすると、必要なところが空けてあって、子どもたちはそこを埋めていくというような形になります。そうすると、やはり書く量が少ない。時間が無いのも十分分かりますが、そういう授業の進め方が少し気に掛かっています。もう少し工夫をしていったらよいのではないかと思います。

やはり、「書く」ということは全ての教科の基本だと思っています。

○松浦市長

ただ単に書くということと、正解というか、ちゃんと書くということは違うとは思いますが、書き方でこれしかないということはないので、そういうところで子どもたちが悩むということがあるのかなと感じます。

○清水教育長

それをうまく指導していくことのできる指導力が教員にあるとよいと思います。

○多々納委員

今年度の学力調査の結果をお聞きしまして、A問題とB問題を比較するとA問題は結構できているけれどB問題の方に課題ある。それを考えますと、島根県も松江市もそうですが、日本人の子どもなので、多分、学力日本一と言われている県の子どもたちと島根県の子どもたちはそもそもの能力にそんなに違いは無いと思います。これは学力調査という試験結果なので、学校の勉強や家庭の支援も含めてどのように学んだかという学びの結果だと思います。学力試験として点数化していますので、どこが日本一だとか、高いとか低いとか、つついランキングの方に目がいってしまいますが、そうではなく、そもそもこの学力試験をどうしてするのかということを文部科学省の文章を見ましたら、学習したことがどのくらい身に付いたか、身に付いていなければどこに課題があるのか、指導上の工夫あるいは教育環境をしっかりサポートして、子どもたちにしっかりした学力を付けようという趣旨であって、ランキングをするということではないと思います。

では、どれくらいの力を付けたらいいのかということですが、先程の報告の中にもありましたが、これを仕切っている国立教育政策研究所によると、100%が目標だと100点ということですよ。100点取っている子どもたちはいるでしょうが、県別とか市町村別に見ると、今までの試験で平均点が100点の県なんてありません。それから70点が目安とおっしゃいましたが、70点以下のところがほとんどです。そういうところを見ると、私はランキングにはこだわらずに、この結果のどこにどう課題があるのか分析し、A問題はまあまあだけどB問題は悪い、低い子どもたちを上げるとともに、高い子どもたちもさらに伸ばすということが大切だと思います。学力世界のフィンランドでは、低い子どもをなくすような取組をして学力の底上げをしているということを聞きます。

先生方の指導力を上げるとか、学校での取組の体制を整える、あるいは、問題の答え方が分からないのではないかとということもお聞きしましたが、そういうことをしっかり分析していただいて、松江市の教育委員会としてできる限りの支援をしていくことが必要だと思います。それから、学力試験を受けた子どもたちを指導する先生が、この試験の採点をできるような体制づくり。「忙しくて採点ができない」ではなくて、子どもたちがどう答えているかということをお教えた先生が採点しながら分析をすることが、先生方の指導力につながりますので、先生方がちゃんと自分たちの子どもたちを指導できるよう、今後分析と支援をしていくことがより一層必要だと思いました。

○松江市長

課題を分析する時に、問題の難しさそのものの問題もありますが、問題の出し方というか、答え方が非常に曖昧で分かりにくいような設問の仕方もあるような気がします。そういったところは少し割り引いて考えていかないといけないと思います。

○伊藤委員

先程市長も、明確な答えが無い問題で自信が無いものはちょっと書きにくいのかなとおっしゃっていましたが、島根県の子どもの性格というか県民性というか、過去の県の学力調査においても無回答というものが非常に多かったです。自分が「これだ」と誰に問われても正しい答えが見つかった場合は書ける。しかし、自分で表現して「こうではないかと思う」と理由を付け加えるものになると、自信が無いから無回答になる。そういうことがあって、事務局が資料に総評を書いています。もう一歩下の分析がいます。例えば算数が非常に悪い。自信が無いから書けないのか、数学的な思考力が無いから論理的に書けないのか、この辺りに問題があると思います。今、教育では「思考力」「判断力」「表現力」ということが言われています。それから、清水教育長が「書くこと」とおっしゃいましたが、やはり、自分の考えをきちんと述べるという習慣が大切だと思います。例えば、学校によっては終わりの会で、自分は今日こういう本を読んだり友達と遊んだりした中で、「こういうことを感じた。」「こういうことが必要だと思う。」と口できちんと表現するというのを習慣付けしている学校もあります。そのことが今度は書くことに通じて、自分の意見や考えたことをきちんと文章で表すことをきちんとやっていかないといけないと。もう一歩、説明をさせるようにしますということ。

では、どうするのか。それから、表現することと合わせてもう一つは、市長がおっしゃったような方法論的なことについて、もう少し具体的に詰めていく必要があると思っています。今、図書館で「調べ学習」が非常に盛んになっています。松江市も司書教諭を全校に配置しています。これによって、まとめて発表するという学習が大分定着してきています。そういうことを、もっともっと子どもたちが自信を持ってできて、「書いて、まとめて、人に伝える」というような、今やっておられる取組をもう少し深く掘り下げていく必要があると思います。

実際に、学校では少しずつ良い方法の取組をしていますので、それをもう少しクローズアップしていくようなことにならないかなと思っています。

#### ○松浦市長

中身はちゃんと分かっているのだけれど、それをきちんと表現することができないのか、あるいは、そもそも実態が分かっているから表現できないのか、その辺りをまず区別して、その上で、分かっているものに如何に表現力を磨いていくかという訓練をすることが大切ですね。

#### ○伊藤委員

私は算数の指導主事をしていましたが、市長が感じられたように、担任の先生方の実感として、算数の問題よりも文章の読み取りができないということがありました。きちんとした数値的なものはありませんが、算数の指導で、子どもたちが文章に書いてあることが分からないということについて、先生方が非常に指導の困難さを感じておられ、大きな課題としておられることがありました。

#### ○多々納委員

この学力調査の問題は、学習指導要領の中の子どもたちが学ぶ必要がある内容から出題されていますので、過去問を解いてみるということもよいと思います。毎年全く同じ問題が出るわけではありませんから、単なる試験対策ということではなく、何年か前の問題を解いてみると、解答の仕方を含めて子どもたちにも勉強になるのではないかと思います。先生方は忙しいのでそういう余裕はないとおっしゃるかもしれませんが、何とか工夫して、過去問にチャレンジする機会をお考えいただくとよいのではないかと思います。



ます。

○清水教育長

過去問については気になっておりまして、実は平成 25 年度から少しやっています。学力調査を今年受ける子どもたちに、去年の全国の問題を少しやっています。この子どもが少しずつ慣れてくれば分かってくると思います。

○松浦市長

こういうのは「場慣れ」みたいなところもありますからね。確かにいきなりやるのでは違いが出るかもしれません。

○清水教育長

テクニク的なところも少しはあると思います。

○布野委員

この 1 年、教育委員会や各学校は、知恵を絞り工夫していろいろな取組をしてこられたとことと思います。ネットで秋田の資料を見ておりました。秋田も自校採点をされていまして小学校の場合は担任の先生が採点され、子どもの弱点が分かって、今後の指導に大変役に立ったというお話が書いてありました。

先程の報告の中で、A問題よりもB問題の解答率が悪い、また問題の意味が読み取れていないのでは、という説明がありました。松江の小中学校の先生方は、生徒一人ひとりをいろいろな角度から分析されていると思うので、個々の課題を保護者の方にも、今後どのような家庭学習や自主学習をやったらよいのかということをきちんと伝えていただけたらなと思います。小学校や中学校では、年に 1 回くらいは個人面談があると思います。私も以前、担任の先生から子どもの勉強のことで具体的に伝えていただいたことが何回かあります。漢字が苦手だったようで、「最近の漢字ドリルは書く回数が少ないので、それで覚えられないのかもしれない。ノートに、ドリルに書く数の倍を書いてみよう。」と言われたことがあります。また、学力テストではなかったのですが、小学校中学年くらいでしょうか、「dl (デシリットル)」や「ml (ミリリットル)」が覚えられず、先生から「お母さんが日常の会話でどんどん使ってください。」と言われたことがあります。

先生方は経験の中でたくさんの引き出しを持っていらっしゃいます。具体的なアドバイスは保護者にとっても大変うれしいものです。反対に、「応用問題をさせてください。」というような抽象的なアドバイスを言われたこともあります。これでは親もピンときません。保護者もいろいろな方がいらっしゃると思いますが、せっかく個人面談という機会がありますので、こういう機会を使って、家庭を巻き込むということも必要だと思います。

○松浦市長

やはり具体的に言ってもらわないと全然分からないですね。

○布野委員

そうです。今は、何をしてもいいという「自主学习」という宿題があり、うちの子どもが小学生のときには、新聞を切り抜いて貼っている子、その新聞の感想を書いている子、漢字をやっている子がいれば算数をやっている子もいました。いろいろありますので、「あなたはここが弱いよ。ここをやろう。」と一言言っていただくと、親もまた気を付けられますし、是非そういったアドバイスをお願いしたいと思います。

○清水教育長

秋田と福井に視察に行った職員がいますので、良い機会ですので、状況を少し話してもらいたいと思います。

## (2) 先進（上位）県の取組の報告

○飯国教職員課長

平成26年2月に秋田県に行きましたので、そのときの様子をお話ししたいと思います。

私は昨年度まで教頭として学校に勤めておりましたが、市の職員の方や県の校長会の方にも参加いただき、全部で10名の先進地視察団を構成して行きました。

まず小学校は、市立向能代（むかひのしろ）小学校です。秋田県の北部に能代というところがあります。バスケットボールが有名なところですが、人口6万人弱の市で、小学校は全部で12校あります。その後、市立東雲（しのめ）中学校に行きました。中学校は市内に6校程度あったかと思います。

秋田県に行き、3つのことを感じました。1番目は「ベクトルの向きを同じにする」、2番目が「指導力を高める」、3番目に「学習を整える」ということが非常に勉強になりました。

まず1番目の「ベクトルの向きを同じにする」ということですが、これは、県・市・学校・教職員の全ての気持ちが学力向上に向いている。子どもたちの学びを大切にしようということで、どの施策についても統一してきちんとしておられました。市は県を信頼し、また現場は市を信頼する。教職員もその施策についてよく理解しておられて一つひとつを丁寧にやっておられました。

2番目は「指導力を高める」ということです。2つ大きな取組があったのですが、1つは秋田型授業と言われているものです。校長先生方は「金太郎あめみたいな授業でちょっと問題かな」と言っておられましたが、我々の視察団が見たところ、授業のレベルが高くて本当に驚きました。流れは5段階になっていました。1つは「①目当てを提示する」、2つ目に「②一人学び」、3つ目に「③グループ交流」、4つ目に「④みんなで交流」、そして最後に「⑤まとめ・振り返り」。これは秋田型授業と言われているもので、全ての教科、全ての教員が意識してやっておられました。何となく画一的ではありますが、誰もが同じようなやり方で学び取れるということで、先生方一人ひとりの授業力は大変高いものでした。

さらに、その授業力を高める一つの方策として、県が進めている教育専門監と呼ばれる指導力に卓越した教員の配置です。これは市が推薦して県が任命するというものです。この方の授業を見ましたが、全てにおいてすばらしく、一人ひとりの学習の様子を細かく観察しておられて、声掛けも非常に良かったです。この方は3校の小学校に行っておられ、午前中に2校、午後に自分の学校に戻られるのですが、1時間授業をすると、2時間目はノートやプリントの添削、3時間目にまた授業をされて、4時間目は同じ。それを午後も同じような形でやっておられました。例えば国語の授業ですが、一つの単元をこの先生が担当しておられ、1年間を通して全クラスのある単元を持っておられます。担任の先生もT2で入って授業を見られたり、他の先生方もこの先生の授業を見られたりします。全員の授業力が上がるという取組として注目をしてまいりました。

そして3番目は「学習を整える」ということです。これは、板書、ノート、掲示物、全てにおいて、私が知る限りの授業ではピカイチでした。板書もパッと見た瞬間に分かる。それから校内に掲示されている学習物も非常にレベルが高い。そして、どの掲示物

も押しピンできれいに貼ってありました。歪んでいたりと、剥がれていたりということが全くありませんでした。これは下駄箱も然りで、整理整頓、いろいろな所に「整える」ということが貫かれていたように思います。そういったところが、いろいろな学習に取り組む児童生徒が最後まで粘り強くやる力になっているのではないかと思います。

今後、大学入試等も変わっていきますけれども、一人ひとりの学びを大事にして、しっかりと先生方の授業力を高めていく、組織で対応するこの秋田県の取組が松江市の参考になるものと思います。以上です。

○清水教育長

自校採点はどうですか。

○飯国教職員課長

秋田県も自校採点をしておられ、担任の先生が必ず見ておられました。島根県内では忙しくて、校長や教頭が代わりに採点をしているところもあるとチラッと聞きますが、やはり一つ一つのことを丁寧に対応しておられる秋田県に学ぶことは多いと思います。

○前田学校教育課指導研修係長

私は福井県へ行かせていただきました。福井県は全国学力調査の結果を見ても、下位が少なく、上位層は少ないものの中位層が厚いという、どちらかというと松江市に似た形かと思っています。

福井市教育委員会の指導主事から話を聞いたのですが、一番強調されたのは、三世代世帯の割合が全国2位だということでした。やはり、おじいちゃんおばあちゃんが家へ帰ったらいるので、宿題などもちゃんと声を掛けられて、子どもたちはそれから遊びに出る。そういった三世代同居をしている家族が多いということが、学力が高い一番の要因ではないかということをおられました。

課題としては、学力上位県であるが故に、進学は都会へ出てしまい、出たきりで帰って来ないということだとおっしゃっておられました。秋田県と福井県が1位・2位というようなポジションではあるのですが、一番自信を持っておられたのは県の学力調査で、福井県独自の学力調査を実施して63年目を迎えているということでした。視察が平成25年でしたのでもう超えています、学力調査を自分たちで作っているんだということ

を自負しておられました。教師も家庭も地域も、そういった学力調査に向かっていくことは当たり前という意識でおられました。問題の作成者は県や指導主事、教育研究所であったりするものもあるそうですが、プレテスト的な要素があり、文科省から視察に来られるそうです。この県学力調査については各校が採点をします。その生データを県に提出し、そして県からデータが各校へ返ってくるというシステムになっています。そういったPDCAサイクルで毎年1月・2月に行われますので、中2の例えば3学期に次年度の教育プランを作ることができるということを言っておられました。そういったそのサイクルで回しながら学力調査を活用していくというところが参考になったと思っています。

資料2に、早稲田大学が文科省から委託を受けて、秋田県と福井県の特徴について調査をしておられるものをまとめています。

私は福井市の清水中学校というところへ行かせていただいたのですが、その校長先生は、研究授業をとにかく頻繁にやっていること、これが先生方の指導力向上には一番大事だと言っておられました。もう一つは、やはり子どもたちに丁寧な指導をしたいということ。福井県の特徴として宿題が多いということを挙げていますが、福井の先生方は、これは多いというよりも当たり前で、子どもたちもやらされているとはとらえていないだろうと言っておられました。基礎・基本を定着させるための課題を出す。教科単位も出すが、学校単位や学年単位など、そういうところを出していくので、これが63年も続いており、当たりの感覚だということらしいです。

それから、福井型18年教育についておっしゃっていました。先程、進学率が高いが故に地元に戻ってこないということが課題であると申しましたが、そういったキャリア教育の視点で、例えば小学校の教員が保育体験を行うといった異校種の交流を行っていることが、福井の特徴であると思います。

もう一つ。福井市の商工会議所の青年部の会長にお会いすることができたのですが、アントレキッズという、これから企業家として福井を担ってほしい小中学校の子どもたちに、商工会議所青年部が中心となっていていろいろなことをやっているということでした。ひょっとしたら地元に戻ってくる手立てになるのではないかとということで、7年くらい続けておられました。300社近いところが講演したりしており、7年間で5,000人以上の子どもたちが参加しているということでした。そういった形を取っていることが、企業側としてもだいぶ意識付けができるようになって、子どもたちにいろいろな機

会で、事業所や企業の良さを伝えることができているということでした。これもひょっとしたら学校教育の中で共通した点で取り組めている点なのかなということを感じて帰ってまいりました。以上です。

○清水教育長

自校採点はどうですか。

○前田学校教育課指導研修係長

自校採点は63年前からやっておられます。

○松浦市長

自校採点というのは、やっているところとやっていないところがあるのですか。

○清水教育長

島根県は全くやっていなくて、松江市が去年からやっています。今は県が、県下統一してやるようになっていますが、県としてまだやっていないところもあると思います。

○松浦市長

やはり、自分の学校の担任が採点をすれば、非常に分かりやすいでしょうね。

○清水教育長

弱点が分かりますので、非常に対策が立てやすく、また早く立てられると思います。

○松浦市長

秋田県などで、小学校などの学力が大学進学等にちゃんと結びついてるかどうかということはあまり聞いたことが無いですが、高校のときに何かあるのでしょうか。

○飯国教職員課長

秋田県へ行きましたら、やはり高校で伸び悩んでいるということは言っておられました。小中学校で授業形態を統一してやっているのですが、高校になると更に専門性が高

まりますので、そういった学習にはちょっと合っていないのかもしれませんが。

○松浦市長

高校と義務教育との間の、そういった連絡などはあまりやっていないのですか。

○飯国教職員課長

その辺りが十分に連絡調整できていないところが課題でもあるということは言っておられました。

○松浦市長

櫻井先生、いかがですか。

○櫻井委員

この学力調査の問題を見させていただいて、小学6年生には6年生の常識的知識を身に付けさせる問題だなと思いました。あるいは中学3年生は、これぐらいは社会常識として知っておかなければいけないという。数学と国語と理科がありますが、全体の総合力を見るための試験だなと感じました。

先程から話が出ていましたが、やはり、文章を読んで問題を理解するということが一番スタートだと思います。それによって自分の知識を総合的に集めてきて判断するということで、スタートはやはり「読み書き」であり、読んで理解する力を日頃の家庭の中でどうやって身に付けていくかが大切だと思います。

学校の中での時間は非常に限られていますので、例えば、子どもが小さなときの絵本の読み聞かせなどもすごく大事だと思うし、小学生・中学生くらいになると、毎日の生活の中で新聞を読んだり、それをどの程度理解しているかご家族がちゃんと聞く、それを1日10分くらいするなど。そういう日常生活の中で学習能力を身に付けていかないと、全て学校の先生方に押し付け、学校で力を付けてくださいと言っても、これは中々難しいことだと思います。家庭教育というのでしょうか、そういうところを徹底的にするとよいと思います。

それから、今回のテストの「振り返り」についてですが、やはり一人ひとりがどういう気持ちで答えたかということを先生が面接して、それを本人にフィードバックするこ

とが重要だと思います。文章を書くテストなどは、どういう気持ちでその答えを書いたのかということ先生方がきちんと聞いてあげる。それによって本人の能力などがよく分かると思います。表に出た正解率だけではなく、その裏に隠されている本人の心理とか、ものの考え方とか、頭の中の仕組みというものを先生方がしっかり理解してあげることがすごく大事だと思います。そしてそれを親にきちんとフィードバックしていく。「家庭学習ではこういうものいいですよ。」というところを指導していただくと、もっと効果的な学力テストの活用ができるのではないかなと思いました。

全体的なこととしては、子どもの学力を左右する大きな要因として3つくらいあるといわれていますが、まずは経済的資本。家庭の状況や地域の状況などもあります。それから文化的資本。例えば、こういうこと言っただけではなんですが、親の学歴などもそうです。先程お話しした子どもが家で新聞を読む習慣、小さい頃の親の読み聞かせの習慣など、そういう文化的な要素が学力に影響を与える。3つ目は子どもを囲む人的ネットワーク。学校の先生の質や家庭環境の人的要素もあるでしょうし、地域のいろいろなネットワークもあるでしょう。それらのいろいろな要素で学校の成績というものは決まってくるので、ただ単に点数を分析して評価してフィードバックすればよくなるという話ではないと思います。その辺を、では松江市が長期的にどう取り組むかということです。経済的な問題は中々難しいでしょうし、やはり行政としては学力向上のために、文化的な要素や人的ネットワークというものをしっかりやっていただきたい。教育は誰でも公平に受ける権利がありますが、それを実現させていくためには、やはり行政の力が非常に大きいと思います。家庭や個人の力だけに任せるということだけでは、中々学力アップしないのではないかという感じがしました。

以上がこの解答を見させていただいた感想です。

○松浦市長

ありがとうございました。確かに、個々の子どもがどういった心理状態なのか、問題をどう理解して解答したかというのは、大変大事なことだと思います。

○櫻井委員

そういうことがされているかどうかだと思います。せっかく行ったテストがそこまで深く分析されているのかどうか気になりました。先生方も忙しいので、その忙しさをど



う解消するかということ大きな課題だと思います。

○松浦市長

小学校の場合だったら、担任が個々の子どもたちに聞いてみるということは、時間的な大変さはあるかもしれませんが、必要かもしれません。

○多々納委員

特に、今櫻井先生がおっしゃった子どもの実態を見るということは教育の原点です。そのことがしっかりできているのかどうか、教員の多忙感とも言われるように、やりたくてもできないという話もよく聞きます。ではその教員の多忙、多忙感はどこからきているのか。口だけなのか本当にそうなのか、見極めも必要だと思います。本当に多忙なのであればいろいろなサポートが必要だと思います。

最近ニュースで見ましたのは、文科省は、今まで特別支援だとか心理カウンセラーといった心理的な面の支援員は配置してきたけれども、今後は部活動の支援員の配置を検討しているといった話も出ておりました。小学校は割と社会体育に移行してきていますが、中学校では先生方が部活動の指導に非常に重点を置いておられ、それはそれで良いのですが、そのために先生方が多忙になって、櫻井先生がおっしゃたように子どもとしっかり向き合えないような状況ができているとすれば問題です。それも含めて学力向上には何が必要なのか見極めて、教育委員会として支援していきたいと思いました。

○松浦市長

教員の数を巡っては、国でも文科省と財務省とで真っ向から対立していますよね。結局、教育の実態に対する認識が全く異なるということなのではないでしょうか。

○櫻井委員

一方では英語の教育なども増えてくるわけですから。国家戦略として英語教育をするということですから。現場の意見が果たしてどれだけ反映されているのでしょうか。

○松浦市長

ある程度レベルを上げていく上では、全て良いとは限らないが、例えば秋田のように

授業の仕方をものすごくパターン化して効率性を上げるということも考えていかなければいけないのではないのでしょうか。限られた先生の数の中で効率を上げていくためには、そういうことも考えていくことが必要かもしれません。

#### ○多々納委員

手っ取り早い方法はそうだと思いますが、少し話にも出た高校での伸び悩みというのはパターン化の課題ではないかと思います。秋田と福井の話を書きましたが、本当に基本的なことを取り組んでおられるのだなという印象です。先生方の授業力の向上や、三世同居が多いといった背景もあったのかもしれませんが、それをうまく活用して家庭環境の整備を行ったり、特別奇をてらったことではない印象でしたので、松江市でも十分できることではないかと思います。一気に無理でしょうけれども、自校採点を徹底したり、先生方全員が1年に1回は授業公開をしたり、学力試験の結果から、ではどうするのかということ、布野委員もおっしゃったように懇談会の際にしっかり家庭に伝えたり、そういう一つひとつのことをしっかりやっていただきたいということを秋田・福井の話から思いました。

#### ○伊藤委員

子ども一人ひとりを捉えるというのは、多々納委員もおっしゃったように原点だと思います。だから、子どもたちのここが弱かったとか、この子の特徴はこうなんだといったことを捉えていけば、分かり方というのも違うわけで、忙しい中でもその辺りはしっかりとやっていかなければなりません。多忙感と言われるが、私は優先順位をもっと学校の中で決めていくべきだと思います。どこかの予備校の先生ではないですが、これを今やらなければいけないとか、優先順位をつけて管理職がアドバイスを、ベクトルを一緒にという話もありましたが、今これをやってほしいということを言ってあげないといけないと思います。子どもを捉える、子どもを見つめるということがやはり一番だと思います。

また、授業の質的なもの、教員の指導力を高めましょうということを県教委も市教委も言っていますが、ではどういう授業をしたらよいのかということもあります。私が教育センターの研修発表会へ行った際、秋田大学の先生が講義に来ておられました。秋田県をずっと指導しておられる先生です。その方のパターンというのがやはりありまして、

先程パターン化の五つの流れがあると言われましたが、私はパターンに決めつけなくてよいとも思っています。ただ大事なのは、一時間の授業で子どもが何を学ぶのかということと、何が分かったのかということ。「目当て」と「振り返り」だと思います。振り返りとして、よく「今日はみんなと話し合えて良かったです」という子もいるが、それではダメで、教科の中で「今日はこれが分かった」と言えるように、「今日の授業はこういう勉強をするよ」という最初の目当てと、終わった際に「これが分かったよ」と言えるような振り返りを徹底していく必要があると思います。松江市も力を入れているという学校教育課長の話もありましたが、教育センターが調査したところ、教育センターが「目当てを大事にしましょう」と言っているにもかかわらず、県内の学校で半分も行っていなかったようです。だから、子どもが一時間授業を受けても「今日の授業は何だったのか」と思ってしまうのです。具体的に「これをやってください」という目当てをしっかりと定め、それぞれの教科の狙いにピタッと合うようなところまで指導していかないと、授業は中々変わらないと思います。忙しさにかまけて目当てをはっきりさせない授業が半分もあると報告されていまして、やはり一時間一時間を大事にし、「指導する」とはどういうことかというのを具体的に先生方と話していかないと変わらないと思います。流れの5つは必ずしもパターン化しなくてもよいと思います。やはり高校生になったら自主的に勉強していかないと、与えられたパターンだけでは難しいと思います。

#### ○松浦市長

私は1年間浪人をしましたが、東京の予備校で1年間勉強しました。今でも思いますが、高校の授業とは全く異なると感じました。まず、予備校生というのは大学受験という目的で皆一致しています。また、教える方々の頭には過去問など全て入っているわけです。この子たちの弱点はこういうところだというのが分かっているのです。子どもたちにもこの先生の言うことを聞いていれば安心だという気持ちがありました。

したがって、ベクトルという話もありましたが、子どもたち自身に学力を上げたいという気持ちを持たせるというのが一つと、それから先生方が「私の言うことを聞けば大丈夫だ」という安心感を子どもたちに持たせるということが大事だと思います。そういう意味で予備校は全く異なりました。予備校の先生などは、物の言い方なども断定的で非常に分かりやすいということはあると思います。教え方のテクニックという面ではかなり鍛えているという感じはします。そこには安心感や信頼感といったものが一方では

あるのではないかと思います。

#### ○布野委員

先日高校のPTA総会に参加した際、校長先生が今話題の映画「ビリギャル」の話がされました。学年で学力がビリだった主人公、高校2年生時の学力は小学校4年生程度だったようですが、彼女が1年で偏差値を40上げて慶応大学に合格するまでを描いたものです。これは実話で、子どもとの関わりのヒントになるので是非観てくださいと校長先生から紹介を受けました。私も早々に観に行きまして、大変感動しました。先程の市長の話でもありましたが、子どもの個性を見抜き指導される塾の先生も素晴らしいなと思いましたし、母親の協力体制や姿勢、そして友達や周りの人々の協力無くしては成り立たない結果でした。これを松江市に置き換えて考えてみますと、やはり、学校・家庭・それを助ける地域、この3者がしっかり手を組み、その取組や施策の中で、本人のやる気にどれだけ火をつけるかということではないかと強く感じました。

#### ○櫻井委員

確かに、高学歴の大学へ行くという方向もあるのですが、これからはやはり地域で頑張れる人をいかに養成していくかということもあると思います。様々な人々と協調できて、様々な人々の意見を聞きながら、その中で問題解決能力といった総合力がこれから非常に要求されると思います。また、地域への思いをいかに醸成していくかということもあると思います。私は医者ですが、中学の時にその進路を決めました。早めに自分の将来像をイメージできるようなものをもっといろいろな場面であつてもよいのかなと思います。自分の目標が定まるということが非常に大事だと思います。そういうものがないと、言ってしまうと学力テストなどをいくらやっても意味がないと思います。学力テストをやるということは、将来に向かって何を自分でイメージして、あるいはいろいろな人の中で自分がどういう立場で振る舞うか、といったことが一番根本ではないかと思っています。

#### ○伊藤委員

櫻井委員が言われた経済的な事情は家庭によって全く異なるということに関連して、秋田県の指導主事が言われていましたが、秋田には塾はほとんど無いようです。したが

って、家庭の経済力のこともあります。学校が責任を持って宿題でも出してやらないといけないのだということ、当たり前のことを当たり前にやっているということが家庭学習だということです。島根県は中学校の家庭学習時間が最下位です。特に小学校からこれを何とかしないといけないと思います。家庭との連携もありますし、今の学力を踏まえて目的意識をもってどういう取組をするか、そのために家庭学習は必要なのだということがまず一つです。

それから二つ目は、文章の読解力が無いため読書や本に親しむこと。県は「子ども読書県島根」といったり、松江市は司書を全校配置したりしていますが、読書に親しむということをもっともっとやっていくべきだと思います。やはり、読む力を付ける中でそうしたものは養われると私は思っています。仮にそれは新聞でもよいと思います。NIE教育もやっていますが、やはり本に親しむことだと思います。小学校に入るまでの読み聞かせなどもよいと思います。この間は父親が読み聞かせているというニュースも見ました。本に親しんだり読書に挑戦したり、具体的に、「週に1冊本を持って帰りましょう」とか、「年間何冊読みました」とか、こういったことも推奨していく必要があるのではないかと思います。

○松浦市長

要するに家庭での学習ですよ。

○伊藤委員

今、松江市はメディアリテラシーに力を入れていますが、それに代わって今度は本に親しむことをしていくとよいと思います。最初は半分強制になってしまうかもしれませんが。

○櫻井委員

先生方の忙しさについては、雑誌で読みました OECD の平成 25 年度の調査によりますと、1 週間当たりの勤務時間は、日本の先生が 53.9 時間であるのに対し、OECD 平均では 38.3 時間でした。それほど違いますので、日本の先生はおそらくかなり多忙で、いろいろな良いアイデアを出しても、先生方にやってもらえないとうまくいかない気はします。この 53.9 時間がどういう状況なのかはよく分かりませんが、現場の先生方の声も気

になります。

○松浦市長

OECD 諸国と何がそんなに違うのでしょうか。現場におられた先生方は何か分かりませんか。

○古藤学校教育課長

具体的にこれという答えはありませんが、超勤が多い先生は 100 時間近くの方もおられますし、少ない先生は 20 時間とかほとんどしない方もいたり様々です。教員の世界というのは、ここまでやったら終わりといった具体の目標が見えにくい世界だと思います。そのため、先生方が一生懸命されればされるほど、いくらでも残って仕事をされます。こういったところが教員の文化としてあるように思います。17 時ですぐ帰れる世界だとも思いませんが、それこそ“子どものため”というのがお題目にあれば、20 時でも 21 時でも 22 時でも残ってやるのが良い先生だといった感覚が一方では多少ありまして、子どもがいるため「18 時に帰ります」とは言いにくいかもしれません。また、部活動の時間は超勤にカウントしているため、特に中学校の先生は、夏場の今頃の期間ですと総体前でもあって 19 時頃まで部活動をされます。それから残って明日の準備や試験問題の作成・採点などを行っています。最近は試験問題も家に帰っての採点は極力避けるようにしています。そうするとどうしても学校に残って準備や採点業務、集計業務をしなければならないといったことが、松江市だけではないと思いますが、時間外勤務が伸びる要因になっているのではないかと思います。

(3) 松江市教育委員会や学校現場での取組の報告

○櫻井委員

もう一つ。昨年度から学力テストの結果を公表したわけですが、公表したことによるメリットや評価をしなければならないと思います。小中一貫教育については大分結果が出ているようですが、この辺りはいかがでしょうか。

○清水教育長

小中一貫教育は 5 年を経過し 6 年目に入りましたので、今年の秋までを目途に検証を

進めています。これが地域との関係や保護者との関係、あるいは学力はどうなったかといった調査の結果を9月までには出し、また報告をさせていただきます。

学力公表については、これはあくまで情報公開の原則できっちりやるべきだと思いますし、学力が向上するような対策を考えていくことのきっかけとして大切だったのではないかと考えています。

それから、何点か私の方からも言わせていただきますと、まず、私も学校現場へは何度も視察へ行っておりまして、先日の校長面接でもこのことが話題にありましたが、子どもたちができる子、できない子に二極化しているということがあります。そうすると、先生方は実際の授業の中でどちらに焦点を合わせていくかということが非常に難しい課題になります。したがって、基本教科においても多少は習熟度に分けてやらざるを得ないのかなと思います。できる子とできない子の両方を伸ばすために、今後はそうしたことも考えていく必要があるだろうと思っています。

また、先程目当ての話も出ましたが、私が授業を見たところ、目当てがバラバラだと感じました。書かない先生もいますし、書いても1行だったりする先生もいます。「今日は何ページのおさらいです」では目当てになっていません。徹底したことで以前よりは書くようにはなっていますが、細かく、「今日はこういうことを勉強しましょう」と子どもと共有して書く方もいます。このことは島根県も低いですし、松江市はさらに低いです。「目当て」から入って「見通し」を行って「振り返り」というのが授業の流れですが、これがまだ徹底できていません。

もう一点。資料にもありますが、秋田も福井も教育専門監やコア・ティーチャーといった核になる優秀な教員を各学校に廻らせて、そこから学び取らせるという手法を取っています。松江市の教員の中にも優秀な教員は多くいますので、そういう方を松江市が選んで県に任命してもらい、その際は多少の待遇をつけることがあってもよいと思いますが、こういう先生方が各学校を回って、例えば午前中は各学校へ巡回し、昼からは自分の本務校へ帰ってくるなど、今後はこういったことを県と連携してやっていくことも、現場を歩く中で必要性を感じました。実現するには障害もあろうかと思いますが、教育委員の皆さんと相談しながら進めていきたいと思っています。

#### ○伊藤委員

事務局に一つ確認しておいてほしいことがあります。清水教育長が言われたように、

何年か前に中学校の教科ごとの優秀な教員を教育センターで研修させた時代がありましたが、今でも続いているのかどうかということ調べてほしいです。

○清水教育長

市内の学校だけでも教員は1,000人近くいます。優秀な教員はどんどん活用していくべきだと思います。

○松浦市長

それは小中合わせた人数ですか。

○清水教育長

そうです。これはもったいないと思うので、市が人選して県にお願いして、励みも必要ですので主幹クラスでの配置をするとよいのではないかと思います。

○松浦市長

しかし、いろいろなところを回るとなると授業の持ち方や時間割に影響が出るのではないですか。

○清水教育長

午前中は近隣の学校を巡回指導し、午後は本務校に帰って学校の業務をする、秋田ではこういったやり方ようです。私もそういうやり方がよいのではないかと思います。

○松浦市長

先生方が多忙だと言われる中で、なかなか難しい面もあるような気がします。

○清水教育長

そのことに関しては、今、県の教育センターと協力して、研修の削減、業務の効率化、指導要録のIC化などを、事務局と一緒に進めているところです。トータルで考えていかないと、どれか一つということではなかなか難しいと思います。



○伊藤委員

市長が言われたように、教員の加配は必要かもしれませんね。

### 【3 まとめ】

○松浦市長

やはり子どもと向き合うということが一番大事ではないでしょうか。その際は、一人ひとりの子どもの問題を具体的に掴むこと、このことが教員の一番の能力ではないでしょうか。これが分かる方はやはり教え方もうまいと思います。こうしたことを学校の先生にはお願いしたいです。本日のキーワードはいくつかあると思いますが、やはり子どもをしっかり捉えること、それを家庭に伝えること、ここから考えていくことが大事ではないでしょうか。

本日はありがとうございました。